P08-13

“ふれあいの赤いエプロンプロジェクト”の直接効果・波及効果

下神白団地自治会事例

久地井寿哉[1]　佐藤香菜子[1,2]　黒田藍[1,3]　木下ゆり[1,4]
石井なつみ[1,5]　伊東尚美[1,6]　福田吉治[1,3]

1 ふれあいの赤いエプロンプロジェクト評価チーム　2 中京学院大学短期大学部
3 帝京大学大学院公衆衛生学研究科　4 東北生活文化大学短期大学部
5 医療法人かしの木内科クリニック　6 福島県立医科大学医学部

日本公衆衛生学会COI開示 ： 演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等は下記のとおり。
受託研究：公益財団法人味の素ファンデーション

背　景

(1)2011年 東日本大震災・原発事故後の避難状況

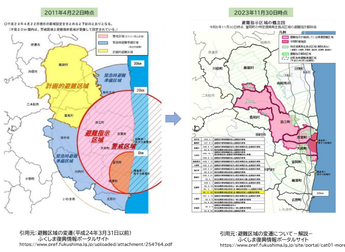

図1　東日本大震災・原発事故後の避難指示区域の変遷

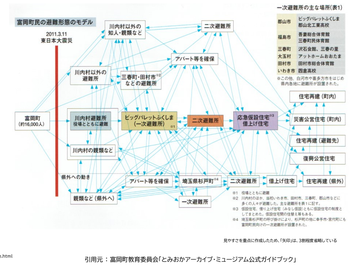

図2 富岡町民の避難形態モデル

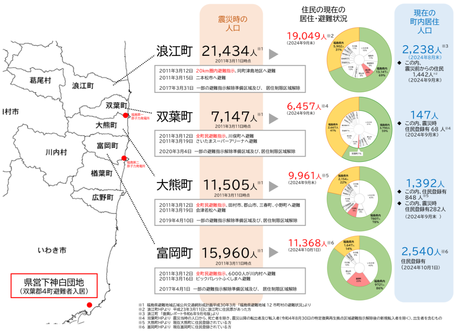

図3　4町(浪江、双葉、大熊、富岡)の人口の変遷と避難経路の一部

(2)復興公営住宅と県営下神白団地について

福島県内の復興公営住宅について

■復興公営住宅とは
東日本大震災や原子力災害によって避難している方が、
低額な家賃で入居できる公営住宅
■ 団地数　：71団地(15市町村)
■ 事業主体：県営 61団地 、市町村営 10団地
■ 戸数　：4,767戸

県営下神白団地の概要・特徴

いわき市内初　復興公営住宅
■ 場所　：いわき市小名浜下神白
(4町へのアクセス:車で1時間～1時間半程度)
■ 構造・階数　：鉄筋コンクリート造　5階建て
■ 棟数・戸数　：6棟　200戸
■ 入居開始　：(1～2号棟) 2015年 2月
(3～6号棟) 2015年 4月
■ 入居者　：富岡町、大熊町、双葉町、浪江町の住民
※入居当初は、各町ごとに自治会が独立して運営されていたが、1年後に統合した
■ 団地内イベント
年間を通して様々なイベントを自治会が企画している。
例)・カフェ　週2回　・健康・栄養セミナー(料理教室)
・カラオケ　週2回
・三味線教室　週1回　・七夕交流会
・健康太鼓体操　週1回　・クリスマス会
・習字教室　隔週

地元が異なる住民同士が共に生活
↓
相互理解と協働の必要性あり

(3)ふれあいの赤いエプロンプロジェクトについて

公益財団法人　味の素ファンデーション(The Ajinomoto Foundation:TAF)は、東日本大震災後、**東北3県**で復興応援事業「**ふれあいの赤いエプロンプロジェクト**」を実施。

事業目的	①被災者の**食生活と栄養状態の改善** ②災害で破壊された**地域コミュニティの再生・活性化への貢献を通じた復興応援**
事業内容	各地域の**パートナー団体(行政、社会福祉協議会、自治会等)と連携した取組** **アウトリーチ型「料理教室」**
テーマ	いっしょに作って、いっしょに食べよう　※料理教室の流れは、図4参照。

＜活動実績＞　開催回数:延**3,771**回　／　参加者数:延**54,434**名

食をテーマにした8年半にわたる被災地支援の活動として他に類のない活動。

図4　赤いエプロンプロジェクト「料理教室」の流れ

本プロジェクトによる参加型料理教室の体験は、**被災者の生活の質を高めることに役立つ**こと、**社会的凝集性(つながり)を高める**などの効果が示唆されている。
特に、地震・津波・原発事故の複合災害に見舞われた福島での開催は、このプロジェクトの象徴的な意味を持つ。

(4)下神白団地でのプロジェクト導入

○ 集会所でカフェなどのサロン活動をしていたが、より住民の外出の機会を増やすためのきっかけや必要だった。また、料理の勉強になるのではないかと考え、2017年より料理教室の活動を開始した。

【活動実績】 2017年～2020年2月
実施回数13回　／　延べ参加者数228名

○ 2019年度で、味の素ファンデーションの直接的な支援は終了。自主開催希望団体には、調理道具セットが寄贈された。
○ 2020年3月、コロナウイルスの影響により、自治会活動を自粛。しかし、自治会は感染と孤独死のリスクを天秤にかけ、県管理者に相談した上で、料理教室等の活動を再開した。
○ 3か月に1回の頻度で、自治会単独で料理教室を継続中。

目　的

福島県の被災者の「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」参加・活動経験とその意味を、アウトリーチを通じて明らかにする。
特に、自主開催が継続されている福島県いわき市にある県営下神白団地自治会の活動に焦点を当て、活動の直接効果・波及効果を明らかにすることとした。

方　法

(1)調査日
2024年3月
(2)調査実施場所
県営下神白団地集会所
(3)方法
・下神白団地内外居住者14名
・フォーカスグループインタビュー
・帰納的・記述的方法による分析

グループインタビュー対象者の属性・特性は、表1のとおり。
また、インタビューは下記の3のテーマで行った。
1)料理教室に関する参加者の評価
2)参加要因
3)被災者コミュニティへの影響に焦点があてられた。

表1　インタビュー対象者の属性・特性

インタビューのグループ		年齢	性別	同居者	震災時居住地	現在の住居	自治会役員	料理教室参加経験	料理教室の役割		
									準備	講師	会計
1	1	60代	男性	配偶者	浪江町	団地内	○	○	○		○
	2	70代	男性	配偶者	大熊町	団地内		○	○	○	
	3	70代	女性	無し	大熊町	団地内		○	○		
	4	60代	女性	配偶者	浪江町	団地内		○	○		
	5	60代	女性	無し	浪江町	団地内	○	○	○		
2	6	90代	女性	無し	浪江町	団地内		○			
	7	70代	女性	配偶者	浪江町	団地内		○			○
	8	80代	女性	配偶者、子、孫	いわき市	団地外		○			
	9	80代	女性	配偶者、子	いわき市	団地外		○			
	10	80代	女性	配偶者	浪江町	団地内		○			
3	11	80代	女性	配偶者、子	いわき市	団地外		○			
	12	80代	女性	無し	富岡町	団地内		○			
	13	70代	女性	配偶者	大熊町	団地内		途中離脱			
	14	80代	男性	配偶者、子	富岡町	団地内		×			

倫理的配慮

本研究の実施については、東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得た。(承認番号R5-20)

結　果　・　考　察

(1)料理教室の直接的な効果

いっしょに作って
いっしょに食べる活動

参加者の
人となりがわかる

外出機会の創出

「楽しい、楽しい、とにかくみんなとわいわいするのが、コミュニケーションというのかな、みんなと。私はひとりでいるから余計に、こういうところに来て、おしゃべりしたい」

「みんなでワイワイ作って食べるのが楽しいから参加するみたいな感じ」

→ 楽しい料理教室を継続することで、**定期的な外出機会の創出となっている**

地域コミュニティにおける結束力の強化
(ソーシャルサポートネットワークの形成)

被災者コミュニティのゆるやかなつながりと広がり
「(料理教室で)お友達が増えた。あんまり、積極的ではないほうなので、参加して(仲良くなれるのが)いいです」

「(料理教室は)つながりっていうかね。やっぱり協力性じゃないですか？やっぱり誰かこう声かけてみんな協力しますって、そっから繋がりだと。上に立つ人がちゃんとここは。やっぱり夏はそうめんでやって流したり、頑張ってもやっぱり協力してくれる人がいないとね、それがだから結局コーヒーだったり、人の集まる場所とつながりですね。」

→ 料理教室は新たなコミュニティでの出会いや交流の場となり、**コミュニティ形成とソーシャルサポートネットワーク形成の一助**となっている

→ **住民同士の会話の糸口**となっている

孤独死や社会的孤立を予防

1人暮らしの高齢者が多く住んでおり、孤独死や孤立は深刻な問題として受け止められてた。その中で集会所での活動は、参加者相互の見守りにも繋がっており、孤立防止の役割を果たしていた。
「みんな出てくればだいたいわかるじゃん。誰がどうしたかとか分かるから、いいじゃないかな、集まると。」

「あれ、今日この人いないけど、どうしたの？っていうと、今日はお医者さんだよとか」

→ 参加者同士の会話により、**相互の見守りとなっている**と共に、参加していない住民の状況の共有を行うことにより**団地全体の見守りにつながっている**

→ 一人暮らしの高齢者にとって日常的な交流の場は大きな支えとなり、**孤立予防となっている**。

自己成長と学習

「簡単に作れるし、栄養があって、だから好きなの。」

「自分の家で作ったことがないようなものを作るから、こんなことして食べるとおいしいんだっていうのはあるよね。」

「自分で作る料理とは違うし、味の素さんのは簡単なの、材料も手近にあるものでつくれるし、簡単にできるから。」

「自分でもできるの、簡単なの。だから嬉しいのよ。」

→ ①料理の**簡便さとオリジナリティ**
②**栄養のあるレシピが好評**
③**新たな学習機会**

(2)料理教室の波及効果

料理教室は年 4 回実施されており、週2回のカフェや、行事による効果とあわせて、**コミュニティ活動における参加ナッジの役割**も果たしていた。

料理教室を含む多様なイベントは
様々な関心を持つ参加者を惹きつける

(3)料理教室に参加しない住民の状況(背景)と周囲の思い

＜参加していない住民の状況(背景)＞
・理由は、健康状態の悪化(自分は参加できないが家族が参加)、多忙など

＜参加している住民の思い＞
・不参加者にも声掛けはするが、強制はしていない。
・孤立している人は違ったつながりを必要としているかもしれない。
・不参加者にも料理教室を通じたつながりを体験してもらいたい。

団地内で料理教室の案内や声掛けなどを継続　→　互いに見守り支援し合う
料理教室は自助・互助の機能を強めている

結　論

1.料理教室は、地域コミュニティにおける**結束力を強化し、孤独死や社会的孤立を防ぐための有効な手段**である。
2.料理教室は、**自己成長と学習の機会**になっている。
3.料理教室が提供するつながりの場は、参加者にとってのみならず、地域コミュニティ全体にとっても、**絆を深め、生活の質を向上させる貴重な資源となっている**。